

第4章 リビング・ヘリテージとしてのロンヴェーク遺跡

奈良文化財研究所企画調整部 石村智

ポスト・アンコール期の都城遺跡としてのロンヴェーク

ロンヴェーク遺跡をはじめとするポスト・アンコール期の都城遺跡は、他のカンボジア国内にあるクメール文明の遺跡に比べると、これまで注目される機会が少なかったことは否定できない。カンボジアの国家的なシンボルであるアンコール遺跡をはじめとする壮麗なモニュメントについてはこれまで学術的にも観光的にも注目を集めてきており、ユネスコ世界遺産にはアンコール期の遺跡であるアンコール遺跡とプレア・ヴィヒア遺跡の2件が登録されている。また世界遺産登録の準備を進めている「暫定リスト」に記載された物件は9件あるが、そのうちアンコール期のものが6件、プレ・アンコール期のものが2件なのに対し、ポスト・アンコール期のものはウドン遺跡の1件にとどまっている。

しかし一部の方面からは、この時期の遺跡に対する重要性の指摘がなされると同時に、その保護の必要性も指摘されるようになってきた。とりわけ内戦終結後から長年にわたってカンボジアで活動を続ける奈良文化財研究所は、文化庁受託事業（文化遺産国際拠点交流事業）の一環として2010年よりカンボジア政府文化芸術省と協定書を交わし、ウドン遺跡およびロンヴェーク遺跡を中心としたポスト・アンコール期の都城遺跡の共同研究を開始したのである。

とりわけロンヴェーク遺跡においては、いくつかの地点において試掘調査を実施したのに加え、遺跡全体をくまなく踏査し、遺構の分布をマッピングするとともにその性質や保存状況などを記述した一覧表を作成した。こうした作業をおこなった理由は、いまだ詳細が明らかでなかったロンヴェーク遺跡の構造を解明するとともに、遺構の存在を特定することで、ゾーニングなどを含めた遺跡の保存管理計画を策定し、開発などによる破壊や毀損から遺構を保護するためである。

ロンヴェーク遺跡の調査をおこなうなかで気づいたことは、この遺跡をはじめとするポスト・アンコール期の都城遺跡の「地味さ」こそが、これらの遺跡の重要な特徴だということである。確かにポスト・アンコール期の遺跡には、アンコール期に見られた石造りの壮麗なモニュメントはほとんどなく、寺院や住居の基壇と考えられるマウンドや、都城を取り囲んでいた土塁や濠、さらには居住遺跡の痕跡を示唆する陶磁器片の散布地といったものが代表的な遺構であり、しかもそれらは現在の遺跡周辺の村落景観にほとんど埋没してしまっているため、認識するのが難しいものが多い。例えば、濠の遺構は空中から観察すると比較的明瞭に確認できるが（図1）、実際にはすでに埋没して水田に利用されるなどしていることが多く、地上からは判別が難しいことも多い（図2）。さらにロンヴェーク遺跡の調査中にも、一部の土塁やマウンドが道路の拡幅や土取りなどによって破壊を被っている事例が確認された（図3）。さらに遺跡の近傍ではレンガ工場が操業しており、そのための土取りも遺跡のすぐ近くでおこなわれていることも確認された（図4）。このように、開発などによる毀損から遺跡を守るためにも、基礎資料として遺構のマップおよび一覧表を作成することは不可欠なのである。

さらに、こうした作業を進める中で、ロンヴェーク遺跡に分布する遺構のすべてがただ単に破壊の危機にさらされているのではなく、そのうちのいくつかは地域住民の信仰のなかに取り込まれることによって守られているという事例を見出すことができた。次項ではそうした事例について見てみることにしたい。

ロンヴェーク遺跡における遺跡の転用

ロンヴェーク王都は1528年に建設され、1594年にシャム軍の攻撃で陥落するまでの間、カンボジアの王都として機能した。ロンヴェーク王都は東西3キロメートル、南北2キロメートルのやや歪んだ四辺形のプランをもち、中心にはワット・トラエン・カエン寺院が創建され、そこには四方を向いた4体の仏立像と四対の石の仏足が祀られた（図5）のををはじめとして、108におよぶ寺院が都城の内外に設けられたと伝えられる（北川1998）。

しかし王都の陥落後、この地は現在にいたる農村的な景観へと戻っていったと考えられる。奈良文化財研究所と文化芸術省がおこなった現地調査では、108におよぶ寺院に相当するすべての遺構を確認することはできなかったが、数多くの寺院の遺構を確認することができた。そのうち、ワット・トラエン・カエンやワット・プレア・アン・テープ（インドラ神の寺）などのようにロンヴェーク王都の時代に創建され、現在まで

存続している寺院がいくつかある一方で、かつての寺院の基壇跡を示すマウンドだけが残されていたり、のちの時代に新たな寺院として建て直されたりしたものも多いことがわかった。

そのうちロンヴェーク遺跡の南側に位置し、現在ヴィヒア・バツ・コーもしくはプレア・ヴィヒア・トゥオル・オン・キエサと呼ばれている寺院は、かつての寺院の基壇跡と考えられるマウンドの上部に、コンクリートとレンガを用いて新しい建物が建造中であった様子が確認された（図6）。さらにその寺院では、明らかに最近製作された仏像が祀られている中に混じって、ポスト・アンコール期もしくはアンコール期にまでさかのぼりうる石製の彫像が置かれているのが確認された（図7）。

またロンヴェーク遺跡中心部に位置し、現在ヴィヒア・コックと呼ばれる寺院も、やはりかつての寺院の基壇跡と考えられるマウンドの上部に、現在の木造茅葺の寺院の建物が建てられているが、マウンドの周辺には化粧割方（彫刻）が施された砂岩製の石材が散在しているのが確認された（図8）。これらの石材はポスト・アンコール期のロンヴェーク王都の時期にさかのぼるものと考えられ、かつてここに存在した寺院の基壇を構成した石材と想定される。すなわちかつての寺院が衰退もしくは廃絶した後、同じ場所に現在の小規模な寺院が建てられたと考えられる。

これらの事例は、かつての寺院が衰退もしくは廃絶した後も、同じ場所に引き続き寺院が建てられ、信仰が継続していることを示す事例といえる。そして一番目の事例のように、過去の遺物（彫像）を転用して、現在の祭祀の中に取り込んでいるという様相も興味深い。

過去の遺構・遺物を現在の信仰のなかに取り込んでいる事例は、こうした仏教（上座部仏教）の寺院だけではなく、民間信仰であるネアック・ターの祭祀においても認められる。ネアック・ターとはいわば土地の霊もしくは守護神であり、もともと仏教とは関係のない土着信仰であるが、実際には仏教やヒンドゥー教とも結びついて信じられている（Ang 1986）。例えば、アンコール遺跡の代表的なモニュメントであるアンコール・ワットにはいくつかのネアック・ターが存在するが、そのうちター・リエイと呼ばれるものはヴィシュヌ神を依代とし、アンコール地域では最強の霊力を持つネアック・ターとされる。ロンヴェーク遺跡の中にも数多くのネアック・ターが存在すると信じられており、中でもネアック・ター・クラン・ムアンと呼ばれるものが強力な霊力を持ち、幾度となくシャムからの侵略軍を撃退したと『王朝年代記』に記されている（北川 2006）。

今なおロンヴェーク遺跡にはいくつかのネアック・ターの祠堂が建てられており、それらの分布する場所はかつての都城の構造と何らかの関係があるかもしれない。例えばロンヴェーク遺跡北東部の、道路のために一部土塁が切通しとなっている箇所の上、ネアック・ター・アップ・パアンというネアック・ターの祠堂が建てられている（図9）。この切通しがロンヴェーク王都の時期まで遡るかは明らかでないが、もしその時期まで遡るとしたら、この場所は城門が設置された重要地点である可能性が高い。

またロンヴェーク遺跡北部の三叉路には、プラサット・プレア・ミエッターと呼ばれる上座部仏教の小祠堂とともに、牛の彫像を祀ったネアック・ター・プレア・コー・プレア・カエウが所在する（図10）。この三叉路もまたロンヴェーク王都の時期まで遡るかはわからないが、もしそうならばこれもまた都城の中の重要地点に位置していると考えられる。

ネアック・ターの祭祀においても、過去の遺構や遺物が転用されている事例を見出すことができる。例えばロンヴェーク遺跡東部に所在するツオル・クラパウ・ニ・ツンと呼ばれるネアック・ターの祠堂では、コンクリート製の基壇の上にワニに乗った人物の彫像が祀られている。ここには砂岩製のシーマ石が置かれているのが確認された（図11）。シーマ石とは上座部仏教の寺院に設置されるもので、境内の内と外の境界に置かれる結界石である。このシーマ石は、その様式からポスト・アンコール期にさかのぼるものと推定される。こうした状況から、おそらくこのネアック・ターの祠堂の周辺には廃絶した仏教寺院が存在し、そこから掘り出されたものがここで祀られているものと考えられる。

またロンヴェーク遺跡北東部に所在するワット・ソトピー・レアンサイ寺院の境内にはいくつかのネアック・ターの祠堂が確認されたが、そのうちのひとつの中にはポスト・アンコール期もしくはアンコール期にさかのぼると考えられるいくつかの仏像と考えられる彫像の破片が納められていることが確認された（図12）。これもすでに廃絶した仏教寺院に祀られていた仏像が、現在のネアック・ター信仰の祭祀の中に転用されている事例といえよう。このようにロンヴェーク遺跡では、過去の遺構や遺物が今日の仏教およびネアック・ターの信仰に転用されること

で残されているという様相が確認された。これはある意味で、文化遺産保護の一形態といえるかもしれない。しかしそれは専門家による学術的・技術的な意味での文化遺産保護ではなく、地域社会のローカルな論理のなかでの文化遺産保護ということができるだろう。

こうした文化遺産保護の形態は必ずしも信仰面に関わるものに特有というわけではない。すでに指摘したように、都城の濠の大部分はすでに埋められ、水田として利用されているが、その土地区画のあり方はかつての都城の構造を反映したものであり、今日なお空中から観察することによってその存在を確認することができる。もし今後、圃場整備などの区画整理がおこなわれることなく、現在の土地利用が踏襲されつづけるならば、こうした都城の痕跡も残され続けることだろう。

リビング・ヘリテージとしてのロンヴェーク遺跡

最近、リビング・ヘリテージという言葉が広く用いられるようになった。それには様々な定義があるが、今日なお遺産を受け継ぐ人たちがそこにおり、継続的に使用されているものを「生きている遺産」すなわちリビング・ヘリテージというのにふさわしいだろう。

リビング・ヘリテージの概念を考える上で重要なのが、1904年にスペインのマドリッドにおいて開催された第6回国際建築家会議で採択された「記念的建造物の保存と修復」憲章である。このなかで、「死んだ記念物」と「生きた記念物」という概念が示され、それらの保存と修復について次のような方針が示された。

死んだ記念物は、破壊から防止するために不可欠な補強だけをおこなうことによって保存すべきである。何故ならば、こうした記念物の重要性は記念物自体とともに消え去るその歴史的かつ技術的価値にあるからである。生きた記念物は、利用され続けるために修復されなければならない。何故ならば、建築の有用性が美の基盤のひとつであるからである。

こうした概念を引用するなら、今ある村落景観に埋没しつつも、多くの都城の遺構が転用・上書きされながら使い続けられるというロンヴェーク遺跡は、「死んだ遺産」よりも「生きた遺産」、すなわちリビング・ヘリテージとしてとらえるのがより適当であると考えられる。

ロンヴェーク遺跡のようなタイプの文化遺産を守っていくには、国や政府がそれを文化財として指定し、行政的に保護・管理していくだけではなく、そこに暮らす住民たちが継続してきた信仰や土地利用のあり方をリビング・ヘリテージとして尊重し、それを利活用していくというのが有効と考える。つまり、ロンヴェーク遺跡をすでに廃絶した過去の王城の痕跡としてとらえるだけではなく、現在も継続して生きる遺産としてとらえ、過去の景観が現在の景観に「記憶」されているととらえるべきである。その上で、住民たちによる信仰や土地利用も、その遺産を構成する一要素とみなすというアプローチが有効と考えるのだ。

現在、すでに暫定リストに記載されているウドン遺跡とともに、ロンヴェーク遺跡などのポスト・アンコール期の王城を文化遺産として保護していく取り組みが文化芸術省を中心に進められており、奈良文化財研究所も引き続きその事業に協力していく予定である。そのなかで、リビング・ヘリテージの概念をカギに、その地域住民も重要な利害関係者（ステークホルダー）として巻き込みながら、遺産マネジメントの仕組みを作り上げることが望ましいと考える。

北川香子 1998 「ポスト・アンコールの王城：ロンヴェークおよびウドン調査報告」『東南アジア：歴史と文化』
27

北川香子 2006 『カンボジア史再考』 連合出版

Ang C. 1986 *Les êtres surnaturels dans la region populaire khmère*. Paris: Cedoreck.



図1 空中から見たロンヴェーク遺跡の様子



図2 地上から見たロンヴェーク遺跡の濠の様子。水田に変わってるのがよくわかる。



図3 道路の拡幅のために一部が重機で削られてしまった土塁の遺構。



図4 遺跡のすぐ近くで行われている土取り作業の現場



図5 ワット・トラエン・カエン寺院（左）と、その内部に祀られた仏足のひとつ（右）。



図6 ヴィヒア・バツ・コー寺院の建造中の建物



図7 ヴィヒア・バツ・コー寺院に祀られたポスト・アンコール期以前の彫像



図8 ヴィヒア・コック寺院の現在の建物（奥）と、
ポスト・アンコール期の基壇の外装石材（手前）



図9 ネアック・ター・アップ・パンの祠堂



図10 プラサット・プレア・ミエッターの小祠堂（左）
およびネアック・ター・プレア・コー・プレア・カエ
ウの牛の彫像（右）



図11 トゥオル・クラパウ・ニ・ツンの祠堂とシーマ
石（結界石）



図12 ワット・ソトピー・レアンサイ寺院のネアック・ターの祠堂（左）と、その内部に祀られたポスト・アンコー
ル期以前の彫像（右）